

博報財団 第9回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究概要

氏名(在住国名)	仁科陽江 (ドイツ)
所属	ボン大学人文社会系アジア研究科日本韓国専攻
招聘回(招聘研究期間)	第9回 (2014年9月1日～2015年8月31日)
受入機関	京都大学
招聘研究テーマ	海外における日本語学研究:理論と応用のための教科書作成
研究目的	海外における日本語研究推進のための基礎を整え、教材資料作成と日本語研究者養成をめざす。ドイツの西洋近代言語学の枠組みに加え、日本国内の日本語学関連の研究成果に鑑み、オーセンティックな言語例やリソースを盛り込んで、生きた日本語記述を行い、日本語研究の基礎文献を整える。形式と機能の記述により、構文法理解はもとより、翻訳や言語教育の分野への応用の可能性も探る。日本語のできない言語研究者や他言語専攻者にも情報提供し、日本語理解の幅広い普及を図る。国内外の最新の研究成果を盛り込んだ入門書でもあり、専門研究へ導入する道しるべでもあるべき基礎文献資料を整理・作成する。

研究概要:

日本国内の言語学・日本語学関連の研究成果について、これまで国内で公開された書籍・論文の調査研究を行った。また、多くの言語系の学会・研究会に参加し、最新の研究動向や学界事情を知り、研究者と交流を行った。

研究対象として言語現象を取り上げる際、学習者にとっては異質のものであり、日本語は難しいと誤解させるようなものを選んだ。いわば現象学的類型論という観点で、日本語研究をすすめる方法を模索した。具体的には主に以下のようなテーマにおいて研究をおこなった。

(1) 類型論的観点からみた日本語の品詞分類について

品詞分類というのは個別言語で行われているものであり、日本語においても多くの伝統的な学説が存在し、多くの用語を生んだ。ここでは Lehmann 2013 の理論をモデルに、日本国内での新しい研究を視野にいれながら、階層的な日本語品詞分類を行った。他の言語と直接比較するわけではないが、類型論的な方法論をとり、機能的な観点から体系化を図った。(Lehmann & Nishina 2015: 163-200)

(2) ドイツ語をはじめとするヨーロッパ言語の指示詞と日本語指示詞の対照

日本語の指示詞は先行研究に富むが、対照研究としてこれまでほとんど行われていない exophoric な用法(Halliday & Hasan 1976)、様態・質・程度の指示、比較表現、複文、後方照応、その他文法化現象などについて対照研究を行った。(König & Nishina 2015: 7-31)

(3) テキストタイプと人称指示

独和翻訳データを用い、人称表現や照応について比較対照した。言語により、また、テキストタイプにより、そのあり方が大きく異なることを提示した。これは、翻訳学の分野にも応用可能な研究成果である。この結果を現在さらに発展させて、指示性とその表現システムについて、考察をすすめている。

(4) ドイツ語と日本語の空間把握 — 認知と類型の関係を問う

認知言語学と類型論のアプローチを融合したプロジェクトで、独文学会大会シンポジウムで発表した。空間把握と文法化について、日独の他、ロマンス語族との対照も行った結果、日本語とロマンス語の方にむしろ、アスペクト表現など似たふるまいがあり、ドイツ語は移動動詞が文法化しにくく、語彙の多義性や項構造によって、日本語にはないような表現が可能になることもわかった。

(5) ヴォイスに関する構文化と言語比較

受動態、受益態、受害態、逆行態、充当態など、構文化によって確立した共時変種としてのサブカテゴリーを表す表現について考察し、日本語における対立関係のパラダイム化を試みた。

上記の(1)から(5)は一見バラバラなテーマを扱ったように見えるかもしれないが、すべて日本語の注目すべき現象として繋がっている。日本語の代名詞は品詞クラスとしては十分独立しておらず、文法的な代名詞をもつ言語とは範疇が異なる。代名詞の役目は指示詞が負ったり、別の人称表現が用いられたりする。日本語において、人称間の関係やその文法的一致は、空間ダイクシス表現やヴォイス構文でも実現されるのである。その意味で日本語における構文化研究の意義は大きい。

最後に、論文集 Yoko Nishina 編「Sprachwissenschaft des Japanischen [日本語の言語学]」Hamburg: Buske (Linguistische Berichte, Sonderheft 20) 編纂について

本論文集は、ドイツ語圏を代表する言語学の学術雑誌 Linguistische Berichte の特別号として出版された。そのためドイツ語圏全国に周知され、各図書館必携の入手しやすい基礎文献となった。執筆者9人のうちわけは、日本から5人、そのうち1人はドイツ語母語話者、ドイツから4人、そのうち1人は日本語母語話者で、それぞれ一般言語学、日本語学、ドイツ語学という様々な分野の専門家である。全員に共通するのは、類型論的・対照言語学的関心と、機能的アプローチであり、その意味で統一のとれた論文集になった。類型論的観点や言語の対照を通して日本語の特徴を一層鮮明に映し出し、それらの現象を有機的に繋げて日本語の類型化も図れるのではないかと思う。この論文集を機に、日本国外での日本語研究、一般言語学における日本語研究、ドイツ語学での日独対照研究など、広く日本語研究への関心を喚起し、将来日本語研究が発展していくことを願っている

展望:

言語現象のひとつひとつを検証しながら、どのような対照によって日本語がもっとよく見えてくるのか、日本語のどのような類型化が可能になるのか明らかにするために、一層幅広い文法分野のテーマも扱っていかねばならないと考えている。